夕闇の咏

ノア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夕闇の咏

【Ｎコード】
Ｎ８２２４Ｖ

【作者名】
ノア

【あらすじ】
嘆くキミを救う神の使いの物語。異世界トリップ、色々ありなファンタジー。

1（前書き）

読んでくだされば すごい嬉しいです！
訪れてくださってありがとうございます。

1

薄い桃色の壁、絨毯。
真っ白なクローゼットには何着ものドレスがずらりとつるされ、同色のタンスの中には柔らかな紫色の羽ペンやムラになりにくく乾きやすいインク、真っ白な紙が多く入っている。
また、同じ色のテーブルの上にはガラスでできた猫の置物、表面にヒビが入った写真立てが置かれている
本棚には『おいしい紅茶の入れ方』やら『ドレスの縫い方』といった実用書から『ファッルーサ航海記』やら『白の魔導師』といった娯楽の本まで色々なものがある。
そして、部屋の中央にある、恐らくこの部屋にあるものの中でも1番大きいと思われるベッドの天井から中を覆い隠すように薄い布がつるされている。
ベッドは柔らかく、横たわると体が埋まってしまうほど。シーツは手触りがサラサラだ。
遊ぶものが揃っている上に、温度調節も自由にできる部屋で、中にいる者は暑さも寒さも感じない。
ご飯は何もしなくてもおいしいものが出て来て、綺麗なお風呂やトイレが部屋の真横に備え付けられている。
勉強は別にやるよう言われていないため、好きなことをすることができるという。
周りから見れば、まさに夢のような生活。
しかし彼女にとっては、ここは彼女を閉じ込める『檻』でしかなかった。
数年前から、彼女はこの部屋にずっと閉じ込められていたから。
陽の光の下へなど、もう何年も出られていないから。
しかし彼女の表情は今日は活き活きとしたものとなっていた。
こんな生活も、今日で終わりだと言ってくれたから。

彼女をこの檻の中から解き放ってくれるという者が現れたから。
窓からその人物が現れ、彼女に手を差し伸べる。
まるで太陽のような笑顔で、彼女が手を出して来るのを待っている。
彼女も嬉しそうに笑って手を伸ばし。

――そして……。

1

この世界には神が存在する。
主に信じる者は何らかの宗教に入っていたりするのだが、中には自らが頭に想像した神を信じている者もいる。
自分の胸の中に神様はいるんだよと言って……。
更に神の存在を否定する者だっている。
そんな、自分を救ってくれる者がいるのなら、なぜ自分は幸せじゃないんだと言って。
そんな色々な考えなど気にせずに、神は空の上に存在していた。
人々が必死に生きているのを、手を出すことなく見ていた。
幸せな人々を見ては笑い、自分の生を嘆く者がいたら悲しそうな顔をしていた。
神にとって、人々は愛すべき子らだったから。

1

「行っくわよー！！」
「ちょ、待て待て待て！今オレあからさまに囲まれまくりだろーが！」

黒いつやつやの髪を肩のちょっと上辺りまで伸ばした少女がバスケットボールを、彼女と同じくらいまで髪を伸ばし、下でちょこんとくくった少年に向かって投げようとする。
少年は素早い上、正確に味方にパスを回すことができるためマークされているにも関わらずだ。

「飛びなさい！」
「んな馬鹿な！……ってうぉぁっ！！？」

何て無茶ぶりを、という態度だったけれども、彼女がいざボールを投げると高く飛び上がり、うまくボールをキャッチする。
まさかここまでできるとは囲んでいた者達も思っていなかったみたいで、唖然とすると同時に見惚れてもいた。
その間に少年が、鮮やかな金髪の少年にボールをパスし、パスした先がすぐにシュートを決めた。
こうして少女と少年の入ったチームが、圧倒的な勝利を収めたのであった。

これで12戦中12敗を迎えたチームの少年達は、このメンバー相手に勝つのは無理ゲーだぁぁぁぁぁ！！と叫んでいた。
何しろ、今活躍していた3人は、学校の中でも異常とされるほどの運動神経をしている。
力はないが、跳躍力と走る速さに関しては野生を感じさせると言われる少女、田口（たぐち）　仁沙（にさ）。
彼女が中心となって動き回り、相手を翻弄させている。
性格はワガママ娘で、怒らせると面倒だとも言われている。
どんな人にも同じように明るく接することから、友達は多い。
ちなみに、この物語の主人公でもある。
彼女をサポートする存在であり、危険人物とマークされながらも自分の役割をきちんとこなしたのは、彼女の幼なじみである山野（やまの）　八（は）郎太（ちろうた）。
昔から仁沙に引っ張られてあちこち行かされたせいで、同等の身体能力を持つようになった少年だ。
ヘタレで女顔であること、更に名前が八郎太だというのにちょっとコンプレックスを持っている。
その似てない双子の兄である甲賀（こうが）は、激しい運動が嫌いということで、シュートだけぬるぬるしている少年だ。
八郎太とは顔も性格も全然違い、女好きなイケメンと称されている。

2

「さて、あたし達が勝ったんだから約束通りアイスを奢ってもらうわよ」

「くそー……」

悔しそうな顔をしながら、負けたチームの大将である少年は財布の中身を確認する。

最近では、勝負をするだけではつまらないのでと、仁沙が負けたチームの人間は勝ったチームの人間にアイスを奢るという制度を設けたのだ。

少年の方は最初渋面を作っていたのだが、自分が負けるかもなんて考えを持ってるからそんなこと言うんでしょ。それなら勝負挑まない方がいいんじゃないの、という挑発に乗ってしまったのだ。

そういうわけで、ここ5戦ほど連続でアイスを奢らされている。

今度こそ勝てるんじゃないか、という考えがちょっとは少年のチームの人間にあったのだが、さすがにこれだけ連続で負けるともう無理だと悟った。

「高橋（たかはし）ぃぃー……もう諦めようぜ……。あの化け物3人衆に勝てるわけないって。そりゃあお前は同等の運動神経かもしんねぇけど、おんなじぐらいのやつがお前1人ぐらいだったら勝てるわけないって」

「くそ、くそ、くそぉぉぉぉぉ……」

高橋と呼ばれた少年は、咆哮をあげる。

その様子を八郎太が見て、アイスを食べられることに上機嫌になっている仁沙に言った。

「なぁ、向こうもきつそうだし、負けたやつがアイスを奢らなきゃなんねぇって制度、やめてやらないか？」
八郎太の言葉に、仁沙は何を頭のおかしいことを言ってるんだこいつ、という顔をする。
「約束は約束よ。何よ、あんたアイス食べたくないの？」
「あんな泣くやつもいるようなやつらからはもらおうと思わねぇよ……」
「えぇ？泣いてるやついるの？ちょっとソーダアイス奢るぐらいで情けないわね」
「いや、ここ5日間毎日自分のものにならないもんを買わされたら、そりゃあ泣きたくもなるって」
「っていうかそんなやつがいるならバスケで挑んで来なきゃいいのに、何で5日も懲りずに挑んで来るのかしら」
「……バスケはあいつの譲れないもんなんじゃね？」
八郎太が目を向けた先では、同級生に羽交い絞めにされている高橋がいた。
「もう諦めろよ！」
「バスケ部副キャプテンが、帰宅部の女なんかに負けられるかぁぁぁぁ！次負けた分は俺が全部奢る！それでいいだろぉぉぉぉぉ！！？」
「やめとけって！！お前今月の小遣いでモンスタークライシス買うっつってたじゃないか！」
「止めてくれるな！男には、やらねばならない時があるんだぁぁぁぁぁ！！！」
……何だあのカオスな雰囲気……。

あそこまで譲れないもんなんかね、と思いながら誰か高橋のために仁沙を説得してやれるやつはいないかと探す。
しかし、いつも仁沙に何か言って1番効果があるのは八郎太自身だ。
その自分が言っても駄目なのだから、他の人が説得できるわけないかとため息をついた。

3

「あ、そういえばあたし、家で宝の地図っての見つけたのよね」
「？宝の地図？」
いきなり話が変わったかと思えば、何を言い出すんだ？こいつは。
「そうそう！よれよれで紙の色も年季を感じさせるものなのよ！」
仁沙が元気良く言いながら、カバンの中から紙を取り出す。
ファイルに入れずにそのままカバンに突っ込んでいた茶色に変色して来ている紙は、ただのゴミとしか思えないほどにくしゃくしゃになっている。
他の、同じように突っ込まれているプリントも、黄ばんでこそいないものの似た感じになっていることから、仁沙がカバンに入れれば何でもよれよれになるのではないかと思った。
しわをのばすようにして開くと、中には簡素な地図が書かれていた。
この辺りの地図のようで、目印として記入されている近くにあるものは八郎太の知るものだった。
この辺りにある山のどこかに狛犬の像があり、その近くに宝があるようで、狛犬の像の近くに赤いマーカーでバツ印がつけられている。
「……ずいぶん近場に宝があるんだなー」
「みたいなのよ！この町に住んでてホントに良かったなーって思ったわ！」
「そうだなー……」
ウキウキしている仁沙とは対照的に、八郎太の態度は冷めている。
それはそうだ。中2にもなって、こんな地図でお宝が掘り出せるな

んて思っていない。

「あー、何よその顔。この地図を信じてないの？」
「いや、信じるやつなんざいねぇだろ」
「あたしん家の物置から出て来たのよ？物置よ、物置！」
「物置から出て来たやつを本物だと信じるやつなんていねぇよ！」
「むー……。せっかく教えてあげたのに！一緒に探してくれるなら魔道具が出て来たら山分けしてあげようと思ってたけど、もう八郎太にはあげない！」
「え、そこで出て来る宝って魔道具なのか？埋蔵金とかじゃねぇの？」
「えー。ずいぶん夢がないわね、そんなしょぼいものしか考えられないなんて」
「いや、埋蔵金って夢と希望に溢れまくりだと思うんだけど……」

宝＝金って考えるオレは、もしかしてスレてんのか？
ってか埋蔵金をしょぼいもんって考えるこいつの頭すげぇ……。
仁沙の家は、はっきり言って八郎太よりも貧しい。
それなのに、八郎太よりも金に興味がないのは結構すごいことかと思われる。
いや、むしろ金がない分、金で得られる幸福をあまり味わっていないから、金をあまり大切なものと考えないのか。

「魔道具が掘り出されて、それを狙って刺客があたし達を襲いに来て、魔道具を渡したら世界が刺客を放ったやつらのものになっちゃうから必死で守るのよ」
「……おーいそこー。そういうことは画面の中でしか起こらないことだからな？とりあえず三次元で、魔道具やら刺客やらってのは出て来ないもんだから」
「わかんないじゃないの！世の中何が起こるか分かんないのよ？」

「いや、確かにそりゃそうだけど、普通に考えて魔道具とか刺客とか、ありえねぇだろ……」

4

そりゃあ出て来たら面白いとは思う。
魔法とかもし本当に実在するのなら、空を飛んでみたりしてみたい。

「もー、夢がないわね」
「いや、この歳になったら、誰でもおんなじような反応をするんじゃねぇの？」
「甲賀は結構乗りそうなんだけど」
「えー……兄貴の方が現実見てる気がするんだけど」

八郎太は兄である甲賀が、あまりファンタジーなことを言っているのを聞いたことがない。
漫画やゲームにもそれほどのめり込んだこともないのではないか。
この前、クラスメートの松山（まつやま）に、二次元が結構好きな割にあまり知識がないことから『にわか』と言われていたが、全く気にした様子もなかった。
何だか好きではあるのだが、それほど熱中することはないみたいで。
更に、超常現象とか幽霊の存在もあまり信じていないみたいで、心霊番組を見ていたら、どういう仕組みで幽霊がいるみたいに見せかけているのか探っている。
あとサンタの存在も小学校1年生の頃から信じていない。
そんな超現実主義というか、夢がない甲賀が宝の地図なんて信じるわけがないと思っていたのだが、意外にも食いついて来た。

「お前ら。何見てんの？」
「あ、甲賀。あたし家から宝の地図を発見したのよ！大分近くに宝があるみたいだから、一緒に探しに行かない？もしかしたら魔道具とか、神殺しの槍とか見つかるかもしれないわよ！」

「また何で神殺しの槍……。お前のチョイスに驚愕だよ。ふーん？どこらへんにそのお宝ってのがあるんだ？」
「そこの山のどこかにあるみたい。何か宝のある場所の近くには、狛犬の像があるみたいなんだけど」
「あんまあそこの山に行かないから、そんなもんがどこらへんにあるか分かんねぇな……。まぁ、そんなでかい山じゃねぇから、１日も歩き回れば見つかるか」
「え、ちょ、ちょっと待ってくれよ兄貴！兄貴何でそんな乗り気なの！？」

自分ですら非現実的過ぎて、真面目に取り扱う気がなかった件を、何で自分よりも現実主義な甲賀がやる気なのかを八郎太は疑問に思う。
問われた甲賀は、逆に八郎太がなぜそんなことを聞くのか不思議だったようで、首を傾げる。

「え。だって見つかったら面白いじゃねぇか」
「面白いじゃねぇか……てそういう問題じゃなくて、あんまりそういう非現実的なことを信じない兄貴が、何でこれに関しては信じちゃって、探す気満々なんだろって思っただけなんだけど……」
「え。別に俺、言うほど現実主義じゃねぇぞ？」
「心霊番組見たら、幽霊の正体を解き明かそうとし、サンタはいないと小学校の頃から思ってる兄貴のどこが現実主義じゃねぇと！？」

あ、もしかして現実主義って言ったら世界中の、現実は見てるけど夢を見ることも忘れてないって方に失礼っていうことか？

5

「え、俺結構インカの宝探しとかしてみたいと思うし、二次元の女の子が出て来たらいいのになーって思ってたぜ？」
「え。……兄貴、そんなことしたかったの？二次元うんたらも初めて聞いたし」
「おう。冒険って憧れね？まだ見ぬお宝を求めて旅に出るって、すごい夢とロマンに溢れてんじゃねぇか！！」

甲賀がそんなにファンタジックな人とは知らなかった。
いつも女性に関して話しているイメージしかなかった。
あと、八郎太に対しては愛の言葉を囁いて来るから、それも大分甲賀のする話としては印象深い。

「ねー、甲賀がリアルを見てるかどうかなんてどうでもいいから、さっさとお宝探すプランを立てましょうよ」
「そだなー。まずメンバーはお前と俺と？」
「あと八郎太ね」
「え！？オレ行くなんて一言も言ってないけど！？」

さっきまでお宝分けてあげないわよ云々の話をしていて、それは嫌だなんて一言も言っていないのに、いつの間に同行することになっているのだろう。

「あんた、あたしも甲賀も行く気満々って流れでついて来ないなんて、空気読めなさ過ぎでしょ」
「あるかどうか分からない宝を探すために体力を使わなきゃなんないことになるなら、空気なんて読めなくてもいいよ！」
「ま、とにかくもうあたしの中ではメンバーに組み込んじゃったん

だから、ついて来てもらうからね」
「強引だなおい！？」
まぁ、放課後暇と言えば暇だろうから構わないのだが。
しかし、放課後ちょっと探すだけでは見つからなくて、絶対に夜中までかかる羽目になりそうなので、八郎太はため息をついた。

2

宝があるという山は、いつも通学路として使っている道の途中にある。
その道は途中で他人様のお家の塀を越えなくてはならないため八郎太はあまり好んではいないのだけれども、このルートでなければ山には行けないため使う。
塀は小学生には辛いが、中学生くらいの背になれば楽に登れるため、何の苦も無く登って下りる。
仁沙に至っては、着地の時に音も立てない。
もしかしたら前世は猫だったのではないだろうか。
塀を越えて少し歩くと、目的の山に着いた。
竹があちこちに生えていることから、タケノコがあるのではないかとも思えるのだが、残念ながら見つかったことがない。
何回か来たことがあるのだが、食べ物を発見したことがないし頂上からの眺めも特に好きなものでもないため、仁沙にはつまらない山というイメージしかなかったのだが、まさかこんなところにお宝が隠されているとは。

6

石段を上りながら狛犬の像とやらがないかと探すのだが、そんなものは一向に見つかる気配がない。

「……ホントにあるのかしら？あたしもう飽きて来たんだけど」

「早ぇな！？おい！」

「だって面白みもない景色ばっか続くんだもの。ねー八郎太、狛犬の像の場所に心当たりとかないの？」

「何でおまえよりこの山に来たことのある回数が少ないオレに心当たりがあるんだよ……。……あ、いやでも待てよ……。もしかしたらさっき見た、木に囲まれた場所、とか……？」

普通に通りやすい場所を通っている途中、木が密集してて人が通れる道なのかは怪しかったが、通路らしきものを発見したのだ。

行ってみて何もなさそうだったら本当に切なくなって来そうな道だったから、黙っていたのだけれども……。

八郎太がその道の存在を教えると、仁沙が眉をひそめる。

「ちょ、あんた何でそんな大事なこと早く言わないのよ！いかにも宝がありそうな雰囲気の場所なのに！！」

「いやだって、あそこ蚊とかすげぇいそうだから、無駄足だったらマジでやだなー……って思って……」

「蚊が寄って来たら、パーンってすればいいじゃない」

言いながら、仁沙がパンと両手で叩く。

叩き真似をしたのかと思ったが、手の表面には潰れた蚊がくっついていた。

八郎太には全く飛んでるのが分からなかったけども、仁沙には分か

っていたみたいで。

「こういう風に、気配を感じたらすぐにパーンってすれば、噛まれることもないわよ」

「いや、無理っす……」

多分、仁沙のような人物は達人と呼ばれる。

八郎太は蚊を潰す達人でも何でもないので、気配を察知して倒すなんて不可能だ。

確実に仕留めるということすら難しいのに。

「無理なら虫よけスプレーでもかけなさい！ほら、行くわよ！」

「やっぱ行きますか……」

八郎太はため息をつきながら、カバンから虫よけスプレーを取り出す。

きちんと用意しているところに、八郎太の女子力の高さがうかがえる。

八郎太、女顔ではあるもののれっきとした男子なのに。

「なぁ八郎太、かゆみ止めって持ってるか？」

「あぁ、うん。何回もかいた後ならかなりしみるやつだけど……」

液体のかゆみ止めというのは、手が汚れないという利点はあるのだが、かなりしみる。

まぁ、そのしみるのこそがいいという人物もいるのだが……。

「しみる方がかゆくなくなるからいいよ！ちょっと貸してくれ」

7

言われるままに八郎太はかゆみ止めを貸す。
さんきゅ、と言いながら甲賀は腕のぷっくり膨らんだ部分にかゆみ止めを塗った。
案の定めちゃくちゃしみたみたいで、腕を持ち上げて無言で悶えていた。

「やっぱそれ痛いよなぁ……。子供用のは痛くならないんだけど、この前売ってなかったんだよ」
「いや、かゆみすぐ取れる分こっちのがいいだろ。それにしても八郎太、かゆみ止めをいつも持ち歩いてるって、女子力あるなぁ」
「……それ、オレに言われても全く嬉しくない言葉だなー……」

八郎太はれっきとした日本男子だ。
だから女顔だとか、いつでもいい嫁になれるだとか、男の娘だとか色々言われているけれども、それは本人にとっては侮辱としか思えない。

「ちょっとー、何してんのよあんた達！置いてくわよー！！」
「んな急かすなよー！……はぁ、マジで仁沙とお前の性別逆転したらいいと思うんだけど」

八郎太は先程記述した通り、いい嫁になると言われている存在だ。
それは、料理がそこらのコックも顔負けなくらいにうまかったり、掃除洗濯もこまめにやる性格だからである。
逆に仁沙は炊事洗濯のみならず掃除も苦手で、部屋は魔境と化している。
しかしスポーツは万能で、更に意外に困っている女の子を助けるこ

とも多いため、女子に大層な人気がある。
八郎太が女の子で、仁沙が男の子ならば、どちらもモテモテだっただろうに。

「……まぁ確かに、仁沙の方が男気溢れた感じだしなぁ」
「あいつ、女の子に対しては、言うほど傍若無人じゃねぇしな」

八郎太や甲賀のことはボカスカ蹴ったり殴ったりしまくっているのだが、女の子に対してはデコピン1つしているのを見たことがない。

「ちょっと！何でいつまで経っても来ないのよ！！」

2人がのんびり話をしていると、ぷりぷり怒りながら仁沙が戻って来る。
蚊に噛まれはしなかったようだが、葉で切りはしたようで、あちこちに裂傷が走っていた。

「おまえ、怪我だらけじゃねぇか？」
「へ？……ああ、痛くなかったから気付かなかったわ」

葉や紙で切った傷というのは、切った当時は痛いし水にもしみるのだが、普通にしていたらあんまり痛くないから分かりにくい。

8

「このまんまにしてたら膿んで来るかもしれねぇから、消毒液塗っとくか」
「え、いいわよ。葉っぱでできた切り傷ぐらいで膿むほど、やわな体してないわ」
「んなもん分からないだろ。それとも何だ？ばい菌を傷口から侵入させて、傷口をぐちゃぐちゃにしたいのか？」
「……うー……」

ここまで言われると断り通すことはできず、仁沙は嫌そうな顔をしながらも、その場で立ち止まって八郎太が消毒を終えるのを待つ。
こんなに嫌がっているのは、やはりしみるのが嫌だったからみたいで、八郎太が傷口に消毒液を塗ると顔を歪めていた。
それにしても、仁沙の扱い方を良く考えているよな、と甲賀は感心する。
もう全く聞き耳持たないって状態の時はさすがにお手上げみたいだが、比較的八郎太は他の人よりも仁沙に言うことを聞かせられてる気がする。
まぁ、仁沙の母は除くが。

「……ん？」

甲賀が見慣れないものを見つけたので声をあげる。
その声に反応して、仁沙と八郎太もそっちを見た。
仁沙が通って行った方向ではないところだ。
坑道の入り口みたいなものを発見したのだ。
使われなくなってから結構経っているみたいで、石が底の方に入っていて、側面に泥がこびりついている台車は朽ち果てている。

触っただけで崩れるほど脆くはなっていなかったが、蹴ったらヒビが入ったのだから相当な朽ちようだ。
ここで合っているみたいで、近くに狛犬の像もある。

「へぇ……。使われなくなった坑道に宝があるなんて、こりゃあまんざら嘘じゃないかもなぁ」
「だから最初からこの宝の地図は本物だって言ってんのに！」
「いやだって、普通の中学生が、物置から出て来た宝の地図に信憑性あるだなんて思わねぇって……」

八郎太が仁沙に答えながら、坑道の中を見てみる。
中は真っ暗だ。坑道というのは太陽の光が入らない作りになっているみたいで、今地上を赤く染め上げている夕日の光は全く入っていない。
これは懐中電灯か何かを持って来る必要がありそうだ。

「なぁ仁沙。今日のとこは帰って、明日改めて懐中電灯を持ってここに来ねぇか？もうそろそろ日も暮れそうだし」
「……そうね。あたしもお腹空いて来たし、今日のところはここまでにしときましょうか」

腹が減っては、戦ができないどころかほとんど動けなくなる仁沙だ。
お腹の事情というのは仁沙にとっては今のところの１番の優先事項なので、おとなしく八郎太の言葉に従って撤収した。

3

今日は高橋は、自分の全財産を賭ける覚悟で学校にやって来たらしく、やけにパンパンにカバンのポケットの部分が膨らんでいた。
あのポケットの中には、全財産を入れた財布でも入っているのだろうか。
高橋の家は特に金持ちでもなかった気がする。だからあんなにパンパンな原因は、小銭にあると言えるだろう。
何で札に変えないのか不思議に思いながら見ていると、高橋がこっちに寄って来た。

「なぁ、今日はバスケの試合ってやらないのか？」
「……うーん、俺らに聞かれてもなぁ……。そこら辺は、うちの姫様に聞いてみないと分からんよ」

うちの姫というのは、もちろん仁沙のこと。
たまに甲賀は、ワガママでまるで城で甘やかされて育ったみたいに思える彼女のことを、姫様と言っている。
そしてこのワガママは八郎太と甲賀にしか発揮されないので、うちの、という言葉がつく。
その問題のうちの姫様は、眼鏡をかけた黒髪長髪ストレートの女の子と、茶髪ショートの女の子と楽しそうに話している。
まぁ、話しているのはほとんど長髪娘と、茶髪っ娘なんだが。

「やっぱりセシルは受けだよね！別に他のキャラなら攻めでもいいけど、ロレンスに対しては絶対に受けであって欲しい！！」
「7話でロレンスがセシルのこと嫁宣言してたしね！」
「え、うっそマジ！？私7話、前半だけ見逃したからそれ見逃して

たわ……」
「動画サイトで見れるから、またググってみて！」
……何だか、受けとか攻めとかちょっと危ない発言をしてて近付けない……。
しかも、セシルもロレンスも男だから、この話はびぃえるってことになるし……。
はぁ……。オレの見てるアニメでそんな話して欲しくなかったなぁ……。おかげでもう、オレはセシルとロレンスをそんな風にしか見れない。
いや、今は腐男子って単語もあるくらいだから、まぁここでオレがあのアニメでＢＬにハマったとしても、世の中の半分ぐらいは笑顔で迎えてくれるんだろけど、何か嫌だ……。
仁沙はさすが姫様という異名を持つくらいあって、箱入り娘的な感じで、２人の話をさっぱり分かっていないみたいだ。
一見普通に話を聞いているように見えるが、その実半分も理解していないと表情から理解した。
いつも元気いっぱい、話に口を挟みまくりな感じの仁沙が、まるで月のような微笑みを浮かべて一言も話さないのだ。
それにしても、仁沙が月のような微笑みを浮かべている上にしゃべらないなんて、珍し過ぎる光景だ。
……しかし、結構あいつせっかくのピュアなのに、何か変なこと吹き込まれたらやだなー……。

10

「そういえば、仁沙ちゃんはどのカップリングが好きなの？」
「？カッププリン？あたし結構どこのカッププリンも好きよ。まぁ、やっぱりカップに入ってないのの方がいいんだけどね」
「いや、カッププリンじゃなくて……。あ、もしかして仁沙ちゃん、そういう関係の話良く分かんないの？」

女子2人の目が怪しげに輝く。
これは、絶対にピュアはピュアのままで置いておこうって目じゃない。
何で、こう世の中というのは白は白のままでいられるよう守ったりしないんだろう。
しかしまぁ、何か頭の中がカオスになってそうな女子に近付く勇気もないので、固唾を飲んで見守る。

「カップリングってのは、簡単に言うと組み合わせのことで」
「ふんふん。卵と醤油の組み合わせはめちゃくちゃおいしくて、もうそれら組み合わせて食べるってのが一般的になってるから、卵と醤油はベストなカップリングって言っていい……って感じ？」
「うん、仁沙ちゃん。訳分からないから、何でも食べ物に結び付けるのはやめようね」

仁沙は、思いついたことをあっさり否定されてちょっとしょんぼりしていた。

「カップリングってのは、恋人同士の組み合わせを言うんだよ」
「ああ、なるほど！安田（やすだ）さんと森口（もりぐち）的な？」

安田さんという女の子と、森口という男の子は、学校中に知られているほどのラブラブカップルだ。
毎日一緒に手を繋いで登下校をし、公衆の面前でも平気でハグやキスをするというすごい方々だ。
仁沙の口からその2人の名前を聞くと、女子2人は顔を思いきり歪ませた。

「……リア充、爆発すればいいのに」
「ホントにね。何度あの2人と掃除場所一緒になって、焼却炉にぶち込んでやろうと思ったことか」

何てひどいことを言っているんだ。
仁沙も、突然真っ黒いオーラを漂わせるようになった2人を見て戸惑った顔をしている。
……まぁ、オレだってリア充爆発しろって、過去に18回ぐらい思ったことあるけどよ。彼女にはいあーんをしてもらってゆるゆるになってる森口の鼻の穴に、ミートボールを突っ込んでやろうって何回も思ったけどよ。
自分がいくら思っていたとしても、やっぱそんな風に言ってるやつを見るのは怖い。

「やっぱり今の時代は男女カップルじゃなくて、男同士の方がいいって！！」
「そうそう！男同士の方が絶対純粋な恋愛してる気がする！」

何だか話が危ない方向に行き始めた。
うわぁぁぁぁぁぁぁ……。これで仁沙が洗脳されまくって、1週間後には、周りの男子をそういう目でしか見られなくなってたらどうしよぉぉぉぉぉ……。

「例えば、山野兄弟とかこのクラスの薔薇カップルの代表よね」
「？薔薇カップルって何？」
「ＢＬカップルって言ったらあからさま過ぎて引かれそうだから、こうやってオブラートに包む言い方を普通はするのよ。山野弟、兄に抱きしめられて恥ずかしがりながらも嬉しそうな顔をしちゃうってとこが萌えるよね」

11

「仁沙、ちょっといいか？」

とりあえず、これ以上のことは言われたくなかったので、話に割り込んで行く。

あからさまに嫌がってるのに……。ってかこっちは背中とか腕とか足とか鳥肌立ちまくってて全力で逃げたがってるのに、何でそんな風に見えるんだろ……。

はぁ……。腐女子フィルターって怖ぇ……。

「ん？何よ？」

「ちょっとこっちこっち」

とりあえずこの危険な2人組から離すために腕を引っ張る。

「何で連れて来たのよ？向こうじゃまずい話だったの？」

「うん、わりぃ。ちょっと色々理由あんだけど、とりあえずさっきから聞きたいと思ってたこと聞くな。おまえさ、今日宝探しするっつってたよな？」

「ええ。せっかく坑道も発見したし、こんなとこでやめたりはしないわよ」

「今日放課後、高橋がバスケの試合しよーって言ってるけど、どうすんだ？」

「もちろん今日は断るわよ。高橋よりお宝よ」

これでも仁沙は、友達、仲間を大切にするタイプだ。

男子より女子を大事にするっていう女尊男卑の思想があったりするみたいな感じはあったりするのだが、特にいつもしゃべったりする

子は色んな用事があったりしても優先したりする。
しかし同時に、友達には結構ワガママでも大丈夫だろうって考えもあるみたいで。
そして高橋にはそのワガママでもいいだろうって思想が働いたみたいだった。

「ごめーん高橋ー。今日はバスケに付き合えないわー」
「え！？」
「あんたと違ってあたしは忙しいのよ！また今度付き合ってあげるから！」

何とも偉そうな言い方だ。まぁ、いつも誘っているのは高橋で、仁沙は真っ直ぐ帰宅するところを付き合ってあげてるのだから、そうなるのも分かるが。
初めての仁沙からのお断りに、高橋は信じられないという顔をしていた。

4

懐中電灯の他に、八郎太の家にはカンテラらしきものもあった。
カンテラの形など全くしておらず、缶に新しい液体ろうを入れただけのものだけれども、火をつけて持っているところはカンテラと同じだ。
これは花火をする時に、普通にろうそくを立てていたら風ですぐに消えるということで作ったのだが、まさかこんなところで役に立つとは。

「何か、これ持ってたら冒険行くって感じするよな」

12

山野家で良くプレイされているアクションＲＰＧでは、洞窟内においてカンテラの存在は必須だ。
何しろカンテラがないと、周りが見えなくて穴に落ちてダメージということがある。
それ以外にもカンテラには、そこかしこにある燭台に火をつけることができるという効果がある。
燭台に火をつけないと扉が開かないというところが結構あるから、カンテラというのはなくてはならないものと言える。
あと普通のＲＰＧでは、カンテラがないと次の話に進めないようになっているみたいで、ダンジョンに入ってもキャラクターがうわ、暗っ！こんな中モンスターに襲われたらたまったもんじゃないぞ！！と言って勝手に引き返している。
ちなみにゲームの中のカンテラは、使用者の魔力を用いるか、何もなくてもついたままというのが一般的だ。

「あとはー、スコップと非常用の食糧と水を持ってくか」
「非常用の食糧って……。そりゃあ今は暑くてしょっちゅう水分取んねぇと日射病になるだろけど、すぐそこなのに食糧はいらねぇだろ」
「宝がなくて帰りが遅くなったら、うちの姫様がお怒りになられるじゃねぇか」
「……あぁ、なるほど。そりゃ大事な持ちもんだな」

仁沙が空腹になると、かなり不機嫌になって扱いが面倒になるのだ。
かつてお腹がすいた時のイライラのままに殴られ蹴られまくった甲賀は、絶対に仁沙を空腹にはさせないように心掛けている。
八郎太は、うまいこと犠牲者にはならずには済んでいるため、そこ

まで気にしていなかった。

「何持ってきゃいいかなぁ？やっぱコンビーフとかの缶食品か？」
「いや、ポッキーとかでいいだろ。その代わり量はいりそうだなー」
「え。お菓子でいいのかよ？」
「腹が減った時のあいつの腹を満たす量の保存食を持ってくのは辛いだろからなー。一応何か口に入れときゃ静かにしてるし、軽いお菓子をそこそこの量でいいだろ」
「だな。ついでに長く口の中で留まってそうなもんしかいいか。飴とか」

2人共、自分がちょっと口に入れるものを少しと、仁沙にあげるためのものをカバンに入れる。
どう考えても仁沙にあげる分しか多いという。

「あ、あと敵が出て来た時のために武器もいるな」
「兄貴兄貴、ここ現実。リアル。三次元。敵なんていないから」
「いや、分からないぞ！俺達が宝を見つけた途端に、宝を渡せーって襲い掛かって来るやつがいるかもしんねぇ。それで、そんなやつらを倒すために美少女がやって来て、その美少女と共闘してるうちに美少女が俺に惚れて……」
「兄貴ー、帰って来ーい」
「ちなみに、俺的に美少女はツンデレがいいです！！」
「いや、知らねぇよ」

13

何で八郎太よりもリア充になれそうな容姿なのに、八郎太よりも二次元の女の子を求めているのか甚だ疑問だ。
っていうかほとんどこういうことを言ってるのを聞いたことがなかったのに、何で言い出すようになったんだろう。
宝探しの影響か。

「お邪魔しまーす。準備できたー？」
「ちょ、おまえ！せめてピンポン鳴らせよ！！」
「えー、何でほぼ毎日来てて自分の家みたいな感じなのに、ピンポンいるのよ。それに、一応入る時お知らせした方がいいかと思って、ドアを蹴ったわよ」
「ドアに何かして音鳴らすのは聞こえにくいよ！っつーか他人(ひと)ん家のドア蹴るなよ！おまえのキックって強力なのに、壊れちまうじゃねぇか！！」
「さすがのあたしも、頑丈に取り付けられたドアは壊せないわよ。それより、準備よ準備」

八郎太が注意するのだが、仁沙は一向に気にする気配がない。
念のため甲賀がドアの様子を見に行ってみたら、ちょこっとだけへこんでいたため、微妙な顔をした。
一応このドア、山野家の人間も全体的に乱暴者なので普通の固さだとすぐに駄目になりそうということで丈夫にしており、かなり強く蹴り飛ばしても何ともならないはずなのだが。
改めて、仁沙のキック力の強さを認識した。
それにしても、へこむほど強く蹴ったのに、逆に聞こえないというのが不思議だ。

「ああ。これで一応いけるはず」
「じゃあ行きましょうか！！早く行かないと、晩御飯に間に合わないわ」
「おまえが晩御飯を気にするなんて珍しいな？いつも後で腹減った腹減った言ってるけど、全然気にしたことねぇのに」
「今日は母さんが早く帰って来てステーキを焼いてくれるのよ！だから遅く帰ったら冷めちゃうの」
「おまえが気にするかどうかってのは、好物が冷めるかどうかなのかよ。まぁいいや。んじゃあちゃっと行ってちゃっと帰れるよう頑張ろうぜ」

5

坑道の中をカンテラで照らすと、いきなり見えたものに八郎太は顔を引きつらせた。
なぜなら、見えたものは落ちている骨だったから。
げ……！ここで殺人事件があった、とか……！？
八郎太がそんないわくつきの場所に入るのは嫌だなー、と思っていると、仁沙が何かを拾い上げた。
土がかかっていて、ボロボロになっている紙。

「これ、何かしら」
「仁沙、それちょっと見せてみ」

もしかしてこの故人のものかもしれないと思い、仁沙に紙を貸してもらう。
それでやっと、この骨の正体が分かり、八郎太は脱力してため息をついた。

14

何と、この骨はフライドチキンの骨だったのだ。
どうやら誰かがここでフライドチキンを食べて、ゴミを捨てて行ったみたいで。
何て人騒がせな！と思いながら、気を取り直して奥に進む。
道は1本しかないため迷うことはないのだが、通りにくい。
進むにつれてどんどん狭くなって行き、片足ぐらいしか入らないほどの広さになる。
これはどう考えても駄目だ。どんなにダイエットをしても、この通路は通れるようになる気がしない。

「……詰んだな」

甲賀が通路を見てぼそりと言った。
甲賀は『詰む』という単語を、どうしようもないの意で使うことが多い。
八郎太ももう駄目だろこれは、と思って小さく頷く。
しかし仁沙はまだまだ諦めるつもりはないみたいで。

「何言ってんのよ！これぐらいでもう無理なわけないでしょ！」
「いやでも実際、もう通れねぇだろ」
甲賀が抗議すると、仁沙は何歩か後ろに下がる。
それで仁沙の意図が2人には分かったが、さすがの仁沙にも坑道を削ることは不可能だと思い、させたいままやらせようとする。
八郎太と甲賀が見守る中、助走をつけて仁沙は狭い通路を拡げようと飛び蹴りをする。
八郎太と甲賀の予想を裏切り、仁沙の蹴りにより岩肌は崩れる。
だが仁沙の期待も裏切り、崩れたことによって更に通路は狭くなっ

てしまった。
もう、某アニメに出て来るアイテムのスモールライトを使っても通れないだろう。

「……マジで詰んだなー……」
「うー……。あ、諦めないわよ！！幸い、崩れたってことはどかしやすいし！！」

八郎太が言った言葉によって更に諦める気をなくしたようで、仁沙は八郎太からスコップをふんだくって崩れた岩をどかす。
不毛にしか見えない行動をし始めたのを見て、２人共もう仁沙を置いて帰ってしまいたくなったが、帰って来た母親に仁沙と出かけたのを見られたため、絶対に仁沙を家に送って行ったかと尋ねられる。
１度甲賀が嘘をつくということをしたのだが、彼らの母親には息子の嘘などお見通しで、笑顔で仁沙の家から電話をかけて来るまで家に入れないと追い出した。
母親は、男の子は女の子をしっかり守るべきだという考えを持っているみたいで。
そんな考えはもう古い、仁沙は守る必要があるほど弱い子ではない、いやそもそも仁沙は女の子かどうか怪しい、と抗議しても駄目だった。
だから帰れない。
仕方がないので、仁沙と共にスコップで岩の破片をどかす。
スコップよりもシャベルの方がこういうのには向いている気もしたが、取りに行って戻って来るのもめんどくさいのでちまちま頑張った。
苦労のかいあって、しばらくするとギリギリ人が１人入れそうなくらいの通路ができる。
そろそろ手も痛くなっていたので、良かったと安堵の息を２人は吐いた。

15

残念ながら奥に入っても、ＲＰＧみたく祭壇があってそこに宝箱が安置されているわけではなかった。
何もない、人が５人ぐらい入れそうな空間が広がっているだけだ。
しかしこの何もないというのが、逆に怪しさを感じさせる。

「さて、頑張るか」

八郎太が、何かありますよーに、と願いながら地面にスコップを突き立てる。
公園や海で砂遊びをするためにしか作られていないスコップで地面を深く掘るというのは何とも大変な作業だったのだが、仁沙も甲賀も見守るだけで替わってくれる気配がない。
まぁこのような扱いはいつものことと言えばいつものことだし、仁沙が行動しまくってお腹が空いて不機嫌になり、ポッキーを献上するという作業の方がどちらかと面倒かと思って気にしないようにして掘っていると、土以外のものに刃が当たる感じがした。
当たりかと思って、どんなものが出て来るのかとワクワクしながら土をどかして行くと、だんだんとそれは姿を現す。
出て来たものは、今までの苦労は何だったんだ、と思わせるような代物だった。
何と、『猿でも分かる黒魔術書』というふざけたタイトルのついた本が入った、ビニール袋だったのだ。
表紙に眼鏡をかけた可愛らしい猿のイラストが描かれている。

「……何だこれ」
「そりゃあ……タイトルに書かれてる通り黒魔術書でしょ」
「……見るからに怪しいんですが」

八郎太の言葉に仁沙が答え、んなもん信じられるかという雰囲気で甲賀がツッコむ。
とりあえず中身は家に帰ってから見ることにした。
ここは暗い上に、今土を触ったばかりなので手が激しく汚れている。
黙々と崩れた岩をどかしたり、黒魔術書を掘り出している間に結構時間が経っていたみたいで、辺りは真っ暗になっていた。

「あぅー……。ステーキのために早く帰ろうと思ってたのにぃ……」
「多分壁が崩れた時点で諦めてたら、充分食える時間に帰れたと思うぜ」
「だって、せっかく入ったのに、ちょっと入ってもう引き返すなんてもったいないと思ったんだもの！まぁとりあえずご飯食べて来るわ！！すぐ行くから、まだ開かないでね！」

言い残すと、仁沙はすごいスピードで家に帰る。
さすが毎回リレーでアンカーを頼まれる人物だ。あっという間に見えなくなってしまった。
ちなみに今のスピードはそのいつもの2倍ぐらい速く、もうマッハと言ってもいい。

「……あいつの食いもんへの執念、相変わらずすごいよなー……」
「ま、仁沙だからな。俺らも早く帰ろうぜ。腹減ったよ」
「だな」

甲賀の言葉に頷き、八郎太も家の方面へと足を向けた。

16

宣言してただけあって、訪れるのは異常に早かった。
何と、八郎太や甲賀がご飯を食べてる最中に来たのだ。
またインターホンを鳴らさずに入って来たが、山野家の親2人は全く気にしない。
にこやかな顔で、仁沙ちゃんいらっしゃい、と迎えている。
親は仁沙をえらく気に入っており、ほとんどのことを笑って済ませている。
まぁそれはいつものことなのでもう何とも思っていなかったのだが、八郎太は別の点がものすごく気になった。
仁沙が、肉をくわえたまま家に入って来たこと。
パンをくわえたまま走る人というのは漫画に良くあるのだが、肉をくわえたまま走って来た人というのは初めて見た。

「あいおーあ、ああいえあいあおえ！？」
「うん、とりあえずそれ食ってからしゃべろうか。何言ってんのかさっぱりだ」
「八郎太、言葉は良く分からなくても気持ちを読み取れてこそ、真のパートナーになれるのよ」
「オレ別に、仁沙の真のパートナーになりたいとか考えてねぇから」
「お母さんは、お父さんがしゃべらなくても気持ちが分かるわよ。……あぁはいはい、もう少し煮物を入れて欲しいのね」
「……聞いてない上に、その読み取り間違ってる気がするんだけど……」

親父はビールが欲しいって思ってるように見えるんだが……。
それとも、オレの読み取りが間違ってんのか？
それかおふくろ、親父にこれ以上ビールを飲まさないようにわざと

間違えたとか……？
……おふくろならそれくらいやりそうなんだよなぁ……。
八郎太が母親と父親を何とも言えない顔で眺めている間に仁沙が食べ終わったみたいで、八郎太に話しかけた。

「八郎太、まだあの本開けてないわよね！？」
「開けてねぇよ。今さっき帰って来て飯食い始めたとこだっての」
「それなら良かったわ。じゃあさっさと食べてよ！早く見たい！！」
「おまえって勝手だよなぁ……」

八郎太がため息をついていると、甲賀が諭すような口調で、女のワガママを聞いてやんのが男の仕事だぜ、と言って来た。
何かめちゃくちゃカッコイイというか、心が広いことを言った。
こういうところが女の子が寄って来る秘訣なのだろうか。
ワガママを聞くのが普通という雰囲気になっていたので、食べるというか詰め込むような感じでご飯を体に入れた後、部屋に戻る。
袋についてた泥を洗っただけなので、まだビニール袋に入ったままだ。
袋を開けて中を見てみると、まるで本屋に入りたてのように綺麗だと分かった。
傷もしわもないため、古さというものを全く感じさせない。
そこがまた、この本がすごいものであることを疑わせる。

17

しかしもしかしたらこの本には何らかの魔術でもかかっていて、綺麗なまま保存されるようになっているということもなきにしもあらずだったため、問題は中身だと本をめくる。
目次の部分には、『転移魔法』だの『天使召喚』だの色々書かれていた。
目次から本文までバリバリ日本語というところがまた眉唾ものであると感じさせる。
これが古代文字とか、全く読めない文字ならばまだ信憑性があったのに。

「八郎太、天使召喚やりましょうよ、天使召喚！！」
「確かに天使召喚にはオレも興味があるけど……。生贄となる人間が必要みたいだぜ？」
「甲賀を生贄にすればいいじゃない！！」

八郎太が、必要なものに書いてある文字を指差すと、仁沙が元気良く言い放ったので、名前を出された甲賀はツッコミに入る。

「おいぃ！？何勝手に人を持ち出してるんだ！？」
「いいじゃない！天使って言ったら大体がめちゃくちゃ可愛くて綺麗な女の人よ！そんな人に命を差し出せるなら、あんたとしては本望じゃないの？」
「俺は生きて可愛い女の子を見たり、生身の女の子とキャッキャウフフしたりしてぇよ！！」
「キャッキャウフフって、あんたが言うと気持ち悪い表現ね。……仕方ないわね、天使召喚は諦めましょうか」

結構他の人が嫌と言ったことを仁沙は代わりにやる人なのだが、さすがに生贄になるのは嫌だったみたいだ。

「じゃあ、この転移魔法ってのはどうかしら？必要なものも紙とペンと納豆だけみたいだし」

「納豆が必要なものっつー魔法もどうだよって感じだけど、確かにやり方も簡単だしやってみるか」

八郎太が冷蔵庫から納豆を持って来て、紙に三角と妙な文字を描く。納豆は練ってからでないと駄目なのか、練る前でないと駄目なのか記述がなかったから、とりあえず練る前のものを紙の上に置く。

「えーっと、アブラカダブラフニャラホニャラモニュニュカメモニュニュ……って何じゃこりゃ」

「……変な呪文だなー」

八郎太が読み上げた後に眉をひそめ、甲賀も何とも言えない顔をする。

ゲームや漫画に出て来るようなカッコイイ詠唱なら、読み上げた後多少の恥ずかしさがあるだけだろうが、これは何なんだという気持ちしかない。

しかし何と魔術が発動したような感じで、紙と納豆が虹色の輝きを放ち出した。

18

「え！？まさかのマジで魔術発動！？」
「当たり前じゃない！！インチキ占い師が売ってた本とかじゃなくて、お宝だもん！」
「ってか、虹色の納豆って食いたくねぇなー」

八郎太が驚いて、仁沙が誇らしげにしている時に、甲賀は緊張感のないことを言い出す。
動じない性格なのか、元々ボケた性格なのか……。恐らく、周りから変態と呼ばれることはあってもボケてるだの天然だのとは言われたことはないから、前者の方が可能性は高いと思われる。
まぁ確かに虹色の光を放つ納豆というのはあまり食べたくない。
しばらくすると光が消え、部屋の中に大きな扉が現れる。
いやに重々しい扉だ。見ているだけで威圧されてる感じがする。
何か出て来るかと思ったが、扉は開かれる気配がない。
まぁ、転移魔法だから出て来るわけがないか。

「これって、どこって場所をしながら開けたら、その場所に行けるってやつ？」
「んな馬鹿な……。さすがにあの未来道具ではないだろ……」
「とにかく入ってみないことには分かんないわね！」

八郎太がツッコんでいるうちに、仁沙が何の躊躇いもなく扉を開けて入ってしまう。
扉の真ん中辺りが虹色の液体が満たされているような状態で、仁沙が通ると呑み込まれている感じになっていた。
それでも何の反応もなく普通に通って行ったということは、体に触れても感覚がない液体なのか。

「俺らも行くかー」
「え、でも……危険じゃねぇかな？」
「俺らまだまだ若いんだから、危険に突っ込むぐらいでいいだろ！！それに、お前に何かありそうなら、兄ちゃんが命を懸けて守ってやるよ！！」
「何か兄貴に助けられたら、後で妙なもん要求されそうだからやだなぁ……。……ぬぁっ！？」
「いいから行こうぜ！」
八郎太は行くのを渋っていたのだが、甲賀に無理矢理引っ張って連れて行かれてしまった。

彼らの人生が変わったのは、この時だった。

1

1

目の前に広がっていたのは、真っ白な世界だった。
四方八方、どこを見渡しても白白白。
どこまで行っても白が続いている。
長いことここに留まっていたら、気が狂いそうだ。
……まさか、異世界ってこんな何もないとこだとはね……。
しかしもしかしたら、探したら何か1つくらい特殊なものが見つかるかなと思い、ちょっとあちこち見て回ろうかと思っていると、何もない空間から八郎太と甲賀が現れた。

「……うわー、何もねぇとこだなー……」

甲賀も仁沙と同じことを思ったみたいだ。
まぁ、ここに来たら大体の者はこういう反応をするか。
だが八郎太は、別のところに着目したみたいだ。
今自分がやって来た辺りを見て、眉をひそめている。

「……行きはヨイヨイ帰りはコワイってか？怖い以前に、帰れなさそうだけどな」
「何それ？」
「行きは楽だけど、帰るとなったら一気に大変になることをそう言うこともあるんだよ。……これ、オレら死亡フラグ立ってね？」
「そんな不吉なこと言わない！！言葉は口にすると力を発揮するって、マコトちゃんも言ってたわよ！」

マコトちゃんというのは、悪霊を祓ってストーリーを進めて行くというアクションRPGのキャラだ。

艶やかな黒髪を腰まで伸ばした、悪霊を視ることに関しては一族随一だという少女だ。
瞳の色が綺麗な緑だから、悪霊が良く見えるという設定である。

「……あー、確かに言ってたな……。ま、確かに言っても鬱になるだけだし言わない方がいいよな」
「そうそう！そんなの言ってる暇があるなら、ここに何かないか探す！！」

仁沙が八郎太に元気良く言った後、遠くまで駆けて行く。
かなり遠くて、小さすぎて姿が見えないというところまで行ってしまったので、仁沙がここに戻って来れなかったらどうしようかと思っていたのだが、杞憂だった。
すぐに真っ直ぐこっちに戻って来たから。
曲がるとかしなかったら、さすがに遠くても普通に帰って来れるみたいで。
帰って来た仁沙は、珍しく顔を青ざめさせていた。

「た、たたた……」
「？どうしたんだよ？ただけじゃ分かんねぇぞ」

甲賀がそう言うと、仁沙は自分が戻って来た方向を指差して言った。

「大変なのよ！！死体があったの！！」
「へ？？」

異世界に来て、初めて遭遇したのが死体とはどういうことなんだと、甲賀は力の抜けたような声を出す。

2

「と、とにかく来て！！」
「お、おう……」

甲賀が何とも言えない顔で頷きながら仁沙について行く。
八郎太も、死体なんて見るのなんかやなんですけど……と思いながらもついて行く。
2人共ゾンビみたいな見た目を想像していたのだが、実際は予想と違った。
明るい茶色のさらさらの髪を肩よりちょっと上にまで伸ばした、肌が真っ白で綺麗な少年が、まるで眠るようにして横たわっていた。
ノースリーブのシャツに裾の広がったズボンを着、首と腕にジャラジャラとアクセサリーをつけているという、ちょっと変わった格好だ。
そして裸足。まぁここの床は真っ白で綺麗だし、つるつるしてるから何も問題はなさそうだが。
昔の人で、族長とかならこういう格好をしている気もする。

「……これ、マジで死んでんのか？」
「だって、耳元で叫んでも起きないのよ？これはもう死んでるって考えるしかないでしょ」
「えー……」

八郎太が少年の腕を取る。
手首に親指を当て、血液が流れているかどうかの確認だ。
……確かに仁沙の言う通り死んでるみたいで、腕がひんやりしてる上に脈も動いていなかった。
念のため左胸に手を当ててみても、鼓動が感じられない。

しかし死んでいることを確認した後、少年の目がうっすら開かれた。
「……むー、誰ー？僕の胸を触ってるやつー……」
「ひっ！！？」
ゾンビ！？と八郎太が少年を蹴り飛ばす。
仁沙ほどではないにせよ、なかなかに強力な蹴りを喰らい、少年はげほっと咳き込みながら体をくの字に折る。
仁沙は、何もしてない少年をなぜ蹴り飛ばすのかと眉をひそめた。
「ちょ、八郎太。あんた何して……」
「こいつゾンビだよ！ほっといたらオレらもゾンビにされちまうよ！！」
「は？」
仁沙が更にわけが分からないという顔をしている間に、少年が仁沙の背後にぬっと立つ。
起きた直後とは違い、凶悪そうな顔だ。
「ふっふっふ、バレてしまっては仕方がないね。ひとまずこの娘から僕達の仲間に……」
少年の腕が仁沙に伸びる。
八郎太は目を見開いていたが、少年の腕が仁沙に届くことはなかった。
もう少しで仁沙の首に手が触れる、というところで仁沙の足の平が少年の腹に深く埋まったからだ。
八郎太の先程の蹴りよりも強力な蹴りを喰らい、少年は吹き飛ばされた。

3

「ふっ、あたしに襲い掛かろうなんて１００年早いのよ！！」

仁沙が少年に向かって言い放つと、少年は仁沙を見て小さく呟いて倒れた。

「……ノってみるんじゃなかった……」

どうやら、八郎太がゾンビと叫んだから、それならゾンビとして動いてみるかーという気になったらしい。

だが仁沙の今の蹴りにより、少年が本当にゾンビになってはいないかと甲賀は心配した。

八郎太は、確かに心臓は動いてなかったはずなのになぁ、とひたすら首をひねっていた

2

「いやはや、乱暴な女の子だなぁ」

「悪かったわね、乱暴で」

甲賀の心配は無用のものだったみたいで、少年はすぐに復活していた。

ひょろっとした見た目とは裏腹に、結構丈夫みたいで。

「そういえば、君達ってどうやってここに来たの？」

「あたし達？何か転移魔法ってのを唱えたらここに来たのよ」

仁沙が答えると、少年は軽く目を見開いていた。

「へぇ……。やっぱ予想通り大人じゃなかったか。ま、僕はもうちょっと小さい子が来ると思ってたんだけどね。まぁ、このぐらいがちょうどいいかな」
「？何わけ分かんないことぶつぶつ言ってんのよ。そういえば、あんたはどうやってここに来たの？あたし達とおんなじように転移魔法でここに来たの？」

仁沙は、当然少年もここにやって来た人物だと思っていた。
なので、結構前に来たのならどうやって生活して来たのか聞こうと思っていたのだが、想像していたものとは違った答えが返って来た。

「ううん。僕はどこかからこの世界に来たわけじゃなくて、すっとこの世界にいるよ」
「へ？……まぁいいわ。じゃあ、こんなに成長するまで、どうやって生活して来たの？トイレとか、食べ物とか」
「トイレも食べ物も、僕には不要のものだよ」
「は？？」

どういうことなんだ、と仁沙が疑問に思ってる間に、少年がちょっと誇らしげに言い放った。

「だって僕、神様だもん」

3人は、胡散臭いものを見る目つきで少年を見た。
甲賀は元々結構超常現象とか、リアルにとんでもない存在がいるとか信じないタイプだし、仁沙と八郎太は信じるタイプではあるものの、もっと性格が偉そうで、人間離れしていると思っている。
だからこんな、人間らしさ満点の少年を神と信じる人は誰もいない。

「……うっそだー。それならまだ、八郎太のゾンビ説の方が有力な

んだけど。生きてる人と全く変わんないゾンビが出て来る漫画もあるにはあるし」
「うわ、ひどい！！……まぁ、いーけどさぁ。どうせ信じてもらえないと思ってもいたしさ。……でも、あの黒魔術を発動すると信じて使ってくれた人達だからちょっと期待してもいたんだけどなぁ……。ふぅ、仕方ないなー。んじゃ今から証拠を見せてあげるよ」
仁沙の言葉に傷付いた顔をすると、少年は真っ白な床を見た。

4

全くの無表情になると、少年は床に手を当てた。
すると触れた部分から水色の光の環が出て来て、床全体に伝わる。
だんだんと光の環の色が濃くなって行き、環の大きさはだんだんと小さくなって行った。
大体痩せた人間の横幅くらいの大きさになって固定された後、少年は環の中央に触れる。
床が泥くらいの柔らかさになっているのか、手はずぶずぶと入り込んだ。
手を取り出した時には、巨大な剣がその手に握られていた。
ゲームの中ではクレイモアと呼ばれそうなその剣は、柄に真っ青な宝石がついており、剣身は水色混じりの銀色だった。
その剣を光の環から離れた場所に置くと、再び床にずぶりと手を入れる。
今度取り出して来たのは、黄色い布が持ち手に巻かれている槍だった。
もう出すものはないのか、両手を叩いて光の環を消した。
何やら人間離れした芸当を行った少年は、汗を拭って右手に大剣、左手に槍を持って言う。

「こっちの剣は天界の中央都市でしか精製していない魔導鉱物で作られたもので、めちゃくちゃ丈夫なんだよ！！何と像が上に６００頭乗っても壊れないっていうね！こっちの槍は東の巨大都市を治める神オーディンが愛用してるグングニルの模造品で、本物には遠く及ばないけどかなりの威力を秘めてるよ！こんなのを出せるのは、僕が神様であるからだよ」

何かオーディンやらグングニルやら、ゲームの中に出て来るものの

名前がいっぱいだ。
いつもなら、何を厨坊臭いことを言ってるんだこいつ、って感じの反応を、自分達が中坊である上に厨坊であるにも関わらず思うのだが、今日は気にせずひたすら固まっていた。
最初に、普通の人間には成し得ないことを行ったから。
少年は3人のその反応を見て、満足そうな顔をしていた。

「ふふん。やっぱり天界でも人気がある武器を出せば反応が変わるみたいだね」
「いや、オレ達がびっくりしてんのは、その像何頭がうんたらとか、オーディンうんたらの武器のすごさじゃなくて、今おまえが武器を出した技になんだけど」
「あれ？そなの？？まぁ、言われてみればこれ魔法だし、びっくりもするかー」

少年は大剣と槍を床に置くと、仁沙達の方を見てにっこり笑う。

「これで僕が神様って信じてくれたかな？」
「え、ええ……」
「そかそか、良かったよ。ってわけで改めて、時空神クロノスこと、白麻（はくま）です。できれば白麻って呼んでね。あの魔術書で訪れてくれたことを心から歓迎するよ」

仁沙がちょっとぎこちなく頷くと、少年は笑みを深くした。

5

さてさて、と白麻という神様は真面目な顔になる。

「君達にここにやって来てもらったのは、ちょっと人間に頼みたいことがあったからなんだ」

「？何だ？自然破壊をやめろとか？」

八郎太が適当に思いついたものを言うと、白麻は違うよー、と手を横に振る。

それにしてもこの人達、相手が神だろうが何だろうが態度は一緒みたいで、八郎太は普通にため口を利いているし、仁沙と甲賀もそれについて何も言わない。

そしてそれを白麻も全く気にしていない。

「自然破壊は人が発展する上で必要なことだと思うよ。……ただ、ちょっとやり過ぎて発展って気もしないけどね。まぁそれは君達にどうにかできることじゃないからいいよ。僕が頼みたいのは、人助けってやつね」

「？人助け？？」

甲賀が首を傾げると、白麻はそそ、と笑みを浮かべる。

「その前にちょっと世界の構造について説明しておこうか。ここ天界からは、君達が住んでる世界以外にも色んな世界があるってのは知ってる？」

「まぁ……。地球以外にも火星とかあるってのは一般に知られてることだしな」

「違う違う。地球とか火星とかそういう惑星区分じゃないよ。うー

ん……何て言えばいいのかな？あ、君達ゲームってやる方？？」
「ゲームぅ？そりゃあ……普通にやるけど」
甲賀が何でゲームが突然出て来るんだ、と疑問に思う。
「んじゃＲＰＧで説明しようか。戦乱のアストリクって分かる？」
「お、おう。有名なゲームだしな」
何で神様が、２ヶ月くらい前に発売されたゲームを知ってるんだ。
八郎太が疑問に思いながらも頷いた。
「あれの中にジョシーアとルシリリスっていう、２つの世界があるじゃない？パンドラの宮殿にある巨大な扉から行き来できるよね」
「ｃｈａｐｔｅｒ４以降から自由に行き来できるようになったよな」
「あのジョシーアとルシリリスみたいな区分のし方かな。全く違う世界で、魔力が世界に存在するかどうかの違いぐらいあるっていうね。それなのに、決まった場所からはきちんと行き来できるっていうね」
「へぇー……そんなの実際にあるんだな」
神の言葉だからか、甲賀は素直に納得していた。

6

それにしても、ＲＰＧを例に出して来るなんて、本当に神様なのか。
まぁ、分かりやすいことには分かりやすいのだが。
多分ゲーマーじゃなかったら通じなかっただろうけれども。

「僕はその、他の世界も見れちゃうんだよ」
「確か、時空の神とか言ってたしな」

八郎太が納得というように頷く。

「そして見てる最中に、死にたいぐらいに絶望してる人がいっぱい見れるんだ」
「それはまた……見たくないものが見えちゃうのね」

例え自分に関係ないこととしても、慟哭しているところなどは見たくないものだと仁沙は思っている。
マイナスの感情が感じられる場面というのは、見ていて楽しいもんじゃない。
アニメのそういう場面ですら、大体ハッピーエンドで終わるからいつかはこの苦しみも終わると分かっていても、気が重くなったりハラハラしたりする。
それが実際にどこかで起こっていると分かっていて、そして現実だからハッピーエンドになれる可能性は結構低いかもしれないと思っていたら、見ている時の憂鬱さは増されるに違いない。
仁沙は人々の嘆きを見ている時の白麻を、気の毒に思った。

「とうてい普通の人には解決できないようなことがいっぱいあるのが、僕には見えちゃうんだよ」

「うん」
「どうにかしてあげたいなーって思うんだけど、僕には諸事情があって無理なんだよね……」
最初は同情しながら頷いていた甲賀も、白麻がチラリと自分の方を向いた頃にはちょっと雲行きが怪しくなっていることに気付いた。
……何なんだ、その何かを求めるような目は。
嫌な予感が、した。
そしてその嫌な予感は、ものの見事に当たってしまった。
当たっては嫌な時ばかり当たるものだ。

「君達、僕の代わりにそういう人達を救ってくれない??」
何言ってんだこいつ、という顔では??と言ったのは八郎太だった。
なぜ普通の人には解決できないようなことを、普通の人である自分達に頼んで来るのか。

「いや、オレら誰かを助けられるほどの力なんざねぇよ」
「それは大丈夫!!僕が君達に力を与えるから!」
「そこまでして、何でオレらを頼りたいのか分かんねぇよ。普通に自分で解決した方が圧倒的に早ぇだろ」
「それは、僕にも事情があるんだってば」
「その事情って何なんだ?頼ろうとしてんだから、言葉を濁すんじゃなくてきっちり答えてくれてもいいよな?」

7

八郎太の言い分は最もだと思ったのか、白麻は説明し出す。

「僕ら神ってのは、よっぽど予想に反したことが起こらない限りは、人の世界に介入したら駄目ってことになってるんだよ」

「へぇ？その予想に反したことってのは、例えばどんなことがそういうことに入るんだ？」

「うーんと、天界の誰かが人間界に行って、人を虐殺ーとかそんな感じかな」

そこまでしないと神は動いてくれないというのか。

まぁ、神なんだから仕方ないのかとも甲賀は思う。

ここで白麻という神を見なかったら、今ほど神を信じることはなかったと思う。

確かに元々信じる人ではあったが、あったら面白いからあると思うくらいの意識しかなかった感じだ。

絶対に神は存在しますと言っている、宗教集団には圧倒されていた人達だ。

「んでもしその規則を破ったら、神様免許を剥奪されてしまうんだよ」

「免許って……。神様になるってのは、車運転できるようになんのと同じかよ……」

「そうそう。車だって事故すれば免許取り消しになるでしょ？それと一緒ね」

何で神がこんなに人間の俗事に詳しいのだろうと甲賀は思った。

しかも白麻、まだ免許が取れる歳に見えないのに。

神様だから見た目の歳は全く関係ないだろうが。

「結構この神様ってのはいいんだよね。好きなだけだらだらごろごろしてても、誰も何も言わないしお腹空かないしトイレも行きたくならないし。ただ、誰かとの交流ってのはほとんどないから退屈にはなって来るけどね。これだけ時間があると、ゲームをいくら出してもすぐやっちゃうし」

「……神様って、存在する意味あんのか??」

何かが存在するのに理由を求めるなんておかしい気もしたが、思わず八郎太はツッコんでしまう。

人間がニートでも自分も人間なせいか何も思わないのだけれど、神がニートというのは何となくおかしい気がする。

これが人種差別というものか。いや、神は人ではないけども。

そのツッコミに、白麻はぷぅと頬を膨らませる。

「ひどいなぁ。それなら、人間ってのは存在する意味があるのかって聞いちゃうよ?」

「……人間が存在する意味……なぁ」

そう言われてみると、人間が存在する意味ってのもあるのか分からない。

未だ存在しないものを産み出すためか。

しかし人間が作れるものを、人間を創造したとされる神が作れないはずがないと思われる。

二次元では、人間が神の手をすっかり離れてしまって、神が持たない情を持つようになったという話もあるにはあるが、実際はそれほど人というのは神が思わぬ方向に進んでるわけではないだろう。

もしかしたら、色々開発しすぎて自然破壊を始めるなどとは考えてなかったかもしれないけれども。

8

「何かの存在に意味を求めるのは、僕は愚かなことだと思うよ。全てのものは、そこに在るだけで価値があるはず」
「おぉー……。何かすごいカッコイイこと言ったわね……」
仁沙が感心したような声をあげると、白麻は得意げな顔になった。
「ふふん。だって神様だもん。……さて、それじゃあ話ずれまくったけど本題に戻ろうか。君達には、神の使いとして働いてもらいたいんだよ」
「うん、違う話を挟んでも、嫌なもんは嫌だよ」
八郎太がキッパリと返すと、白麻はそんな！と傷ついた顔をする。
「こんなに頼み込んでるのに！！」
「あんま頼み込んでるって感じしねぇんだけど……」
「心の中では土下座をしてるさ！！」
「とりあえず、心の中でスライディング土下座をされても、お断りさせていただきます」
八郎太のつれない返事に、白麻は恨めしそうな顔をする。
「うー……こんなに頼み込んでるのに……。内部事情まで話したのにぃ……」
「こんな、人々の悩み解決に関してパンピーなオレらに頼んで来ないでさ、もっと別なそういうのを職業にしてそうな人に頼めよ」
「この世界に来られないから無理だよ。そういう人はお宝とか信じないから、あの黒魔術書発見してくれないもん」

「黒魔術唱えさせなくてもいいようにすればいいじゃねぇか。無理矢理ここに連れて来るとか」
「それは人間に介入することになるから駄目だよ」
「人間界に黒魔術書置くのも、介入になると思うんだけど……」
「黒魔術書置きに行くのは、別に神としての力を使わなくてもいいから介入にならないんだよ。人化して適当な場所に埋めるだけだから」
「人化って、神の力でするもんじゃないのか……??」

とにかく、どうあっても3人に神の使いになってもらいたいみたいで。
八郎太が色々突っ込んでも何か納得しがたいことばかり言って来るし、良く考えてみれば大量に黒魔術書をばらまいて、色んな人を連れて来れば、誰か1人くらいは了承してくれる人が出て来そうなのに、それをやる気もないみたいだし。
まぁ、数打ちゃ当たる方式を考えつかなかっただけかもしれないが。

9

「……こうなったら、最終手段に出るしかないね……」
「？最終手段？？」
「僕はこれでも善良な神の部類に入るから、こんな卑怯な手は使いたくなかったんだけどね……」
「いや、オレ的にはあんまり善良に見えねぇんだけど」
黒魔術書で無理矢理呼び出して、自分の用事を押しつけるなんて、善良な神がすることではないと八郎太は思ったので、そうツッコむ。しかし、白麻は全く聞かずに話を続けた。
「この世界から、君達を君達の住む世界に帰せるのは僕だけなんだよね」
「……おう？」
何だか嫌な予感がした。
そして甲賀のその予感は、悲しいことに的中した。
「言うことを聞いてくれないと、君達を帰してあげないよ」
語尾に音符か星がつきそうな言い方だ。
その神の力を利用しているサマに、はぁ！？と八郎太は声をあげる。
「人に関わるのはあんまり、みたいなことを言ってたくせに。思いっきり関わってるじゃねぇか！！」
「ただし僕のテリトリーに入って来た時なら、どういう処置を取ってもいいんだよ」
「……何だそりゃ」

八郎太が脱力していると、仁沙がいいじゃない、と言う。

「異世界に行くなんて、めったにどころか、普通にしてたら絶対にできない体験よ！」

「危険を冒してまで、そんな体験したくねぇよ！」

「どんなことにもリスクはつきものよ！！リスクを恐れて何もしなかったら、人生において成功なんてできないわよ！！」

「いや、それはそうだけど、命を落とすかもしれないって勢いのリスクを背負ってまで、成功したいだなんて考えてねぇよ」

そんな八郎太に、仁沙はだから八郎太は駄目なのよ、とキッパリ言う。

「んー、あんたがそんなに嫌ならあたしと甲賀だけ行って来るわよ。甲賀が嫌ならあたしだけでもいいしね。別に人数指定はなかったから、それでいいよね？白麻」

「うん。多い方がいいにはいいけど、別に多くなきゃ困るってことはないし」

……そんなこと言われて、1人だけで行かせられるわけ7ないって。自分が1人で行かせたばかりに、幼なじみが死んだなんて事態になるのは、八郎太も甲賀も勘弁だった。

仁沙にこう言われると断ることなどできるわけがない。

仕方がない、というように八郎太はため息をついた。

「……はいはい、オレも行きますよオレも」

「仁沙1人で行かせられねぇもんな。俺も行く」

八郎太は半ばヤケクソ、甲賀は仕方ないなという感じで言った。

10

白麻が今までで1番嬉しそうに笑い、3人を手招きした。

「んじゃ君達に、いざという時のために武器を渡しておこうか」

「は？武器がいるようないざという時って、どんな時だよ？」

「そりゃあ、何者かに殺されそうになった時だね。素手じゃ勝てない相手が現れることも結構あると思うから」

「……」

そんなものがいる場所に、まだ10代前半の子供を送り込むなんて、この神は鬼畜すぎると思える。

しかし仁沙は逆に目を輝かせた。

「へぇー。武器がいる世界なんて、すごいわね！」

「……おまえ、何でそんな楽しそうなんだ？」

危険なところに連れて行かれようとしているのに。

「だって、リアルRPGよ！！めちゃくちゃ楽しそうじゃない！」

「あれは画面の内側で行われていることだから楽しいことであって、実際にあったら楽しいってより恐ろしいって！！」

「んもー、そんな風に思ってるからあんたは人生を損してるのよ。どうせ嫌がろうが楽しもうが行かなきゃなんない感じなんだから、楽しみましょうよ」

「そうそう。どうせなら喜び勇んでよー」

無理矢理行かせようとする本人が言うなという話だ。

八郎太が白麻を睨みつけていると、白麻が何かを八郎太に差し出し

て来る。
先程出した大剣を、鞘に刺したものだ。
さっきからずっと仁沙らとしゃべっていたのに、いつの間に鞘なんて出したのだろう。

「はい。これ君の武器ね」
「……あのさ、筋トレもまともに持ったことがないようなガキに、こんなでっかいもんが持てると思うか？」
「そんなことを言ったら、筋肉なんて存在を知らないような体の僕がこれを持ててるのもおかしな話だと思うよ」
「おまえは神様だから、マンモスだって持ち上げられてもおかしくねぇ気がすんだけど」
「いやいやいや、筋力は残念ながら一般人よりないって感じだからね？マンモスなんて上に乗ったら間違いなく潰れるからね？まぁまぁ、騙されたと思って試しに持ってみてよ」

騙されてる感じしかしなかったのだが、ささ、と大剣を握らせて来ようとするので、仕方なく受け取る。
予想に反して、大剣はかなり軽かった。
プラスチックでも持っているのか、という感じだ。

「軽っ！！ちょ、おまえ、これ逆にちゃんと攻撃できんのか心配なんだけど！？」

11

「失礼だなぁ。威力は折り紙つきだよ？」
「……折り紙つきってのは、すごいということが保障されてるってことだけど、おまえの言ってる折り紙つきってのは、折り紙を切れる程度の威力しかないってことじゃないのかって心配だよ」
「折り紙がついてるって言ってんだからそう想像するのはおかしいでしょ。……はぁ、仕方ないなぁ。疑われてるのはめんどくさいから、とりあえず証明しようか」

白麻が嘆息しながら、手を1度叩く。
すると、何もなかった空間に突然銀色の正方形の物質が現れる。
かなり重そうで、これで色々なものを潰せそうだ。
更にその隣に、大きなかぼちゃを出現させる。
何がしたいのか疑問に思っていると、白麻は右手に包丁を出現させて言った。
刃は厚めだが先がとがっているところを見ると、これは出刃包丁か。
一般に良く使われているかと思える包丁だ。魚も野菜もほぼ何でも切れると言われていることから、これ1つしかない家庭もあるのではないか。

「はい。んじゃ威力の違いが分かりやすいように、比較して説明するよー」
「お、おう……」
「まずこっちの包丁。これ普通の包丁ね。テレフォンショッピングとかに出て来るような」
「うん」
「まず、この包丁の切れ味を確かめるために、こちらに用意しましたるかぼちゃを切ります」

包丁でかぼちゃを切るのは難儀なんじゃあ……と思っていたのは、全くの杞憂だった。
かぼちゃのてっぺんに刃を置いて上下に動かすと、かぼちゃが真っ二つに分かれる。

「まぁ、これで一般的な切れ味の包丁ってことが証明されたでしょ？」
「いや、一般的な切れ味の包丁は、かぼちゃをんな簡単に切ることは無理だから」
「ん？そなの？まぁいいや。この包丁が普通に切れるものだってことを証明できればそれでいいから。んじゃ次はこの包丁で、こっちの鉄の塊を切ってみたいと思います」

言いながら鉄の塊に刃を滑らせる。
キーキー耳障りな音をたてるばかりで、一向に切れる様子がない。

「さっきのかぼちゃは切れたのに、こっちの塊は切れないよね？」
「まぁ……かぼちゃより鉄の方が圧倒的に固いからな……」
「そうそう。それを分かってくれたらいいんだよ。んで次に、その大剣でこれを切ってみて」

こんなプラスチックのような軽さの剣で果たして本当に切れるのか、といぶかりながらも言われた通りに鉄の塊に刃を振り下ろしてみる。
豆腐のようにスパッと……とまではいかなかったものの、手ごたえは小さかった。
八郎太がその切れ味に驚いていると、白麻は得意気に言って来た。

「ほら、良く切れるでしょ？プラスチック並みの切れ味じゃないこと、証明されたでしょ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8224v/

夕闇の咏

2011年9月23日16時53分発行